

優秀賞

持続可能な親切を

福岡県 小石小学校 六年

山口 凜花

ある日、私はスーパーに行った。ケーキ作りの材料を買うためだ。必要な材料をかごに入れていく。生クリーム・小麦粉・砂糖……。次第に買い物かごが重くなり、パンパンになっていった。カートに載せればよかった、とレジに並んだときに後悔した。というのも、お昼時だったこともあり、どのレジも行列ができていたのだ。まったく、ついていないなああと、イライラしながら自分の番がくるのを待っていた。

並んでしばらくしたとき、私の前に並んでいたおじいさんが後ろを振り向いた。私の手元に目をやると、「重いやろ。先、どうぞ。」と、声をかけてきた。

「えっ？」

一瞬、何が起こったのかわからなかった。そのあと、おじいさんは私に順番を譲ってくれようとしているんだとわかり、周りにも人がたくさんいるし、自分だけ特別扱いされるのもいやなので、遠慮しようかと思った。でも、おじいさんのやさしそうな目を見ると、断るのも悪いかなと思い、レジに進んだ。私はとりあえず、「ありがとうございます。」とだけ言った。

会計を済ませて袋に荷物を詰めようとしたとき、さっきのおじいさんがまた声をかけてくれた。

「おつり、取り忘れていたよ。」

おじいさんは、わざわざ私のところに持ってきてくれた。今度は恥ずかしさもあり、「ありがとうございます。」と小さな声で答えるのが精一杯だった。

そんなことがあってから、数日経ったある日、道を歩いていたら、立ち止まって辺りを見回している、大学生くらいの女の人の人を見かけた。どうしたんだろう、と思ったけれど、それ以上のことはしなかった。でも、すれ違ったあと、やはり気になり、勇気を出して声をかけてみた。

「どうかしましたか。」

どうやら、銀行に行く道がわからなくなっただけらしい。私が道順を説明すると、笑顔で「ありがとう。」と言ってくれた。そのひとことで、私は勇気を出して親切にしてよかったと思った。同時に、あのおじいさんのことを思い出した。

親切なことを実行するには、ちょっと勇気がいる。私は、一度考えてからでないと、いざ行動に移せない。でも、買い物中に会ったおじいさんは、特別に勇気を出して私に声をかけたようには思えなかった。たぶん日常的に、人に親切に振るまっているんだろう。人にやさしく接することを特別なこととして捉えず、一つの習慣として身につけたおじいさんの行動が、どれほど素晴らしいことだったか。改めて考えると、そう思う。

私はまだ、人に親切に接しようとするとき、心の中で一度考えてしまう。でも、見て見ぬふりをするよりはいいと思う。人に親切にする経験を積み重ねて、いつかは、自然な形で親切な振るまいができるような大人になりたい。